

北海鋼機 デザイン アワード NEWS 5th-vol.3

北海鋼機デザインアワード NEWS
は、本アワードの審査会の様子などを
レポートするものです
発行:北海鋼機デザインアワード事務局

第二次審査（現地審査）

2021年11月2日（火）～3日（水）
会場：

現地審査（訪問順）

- 1日目 北海道立北の森づくり
専門学院（旭川市）
PREMIUM SHOP
HUSQVARNA
SAPPORO（札幌市）
KDDI エボルバ
Polaris Sapporo
（札幌市）
- 2日目 大きなテラスのある家
（札幌市）
夕張市拠点複合施設
りすた（夕張市）
厚真の家（厚真町）
mother`s+（マザーズ
プラス）（白老町）

最終選考 北海鋼機株式会社内

参加者：

審査委員長

山田良
【札幌市立大学デザイン学部教授】

審査委員

角田洋一
【北海鋼機株式会社代表取締役社長】

小西彦仁

【(公社)日本建築家協会(JIA)北海道
支部長】

川島隆司

【北海道板金工業組合理事長】

菅原秀見

【(株)北海道日建設計】

藤沢レオ

【金鋼工芸家・彫刻家】

事務局

小倉寛征

【北海鋼機デザインアワード事務局委員
員長／(公社)日本建築家協会(JIA)
北海道支部】

弘田亨一

【(公社)日本建築家協会(JIA)北海道
支部】

佐藤正人

【北海鋼機株式会社】

佐藤真規

【北海鋼機株式会社】

記録

登尾未佳

受賞作品が決定！

新型コロナウイルス感染症の影響によって、当初予定から1年延期しての開催となった第5回北海鋼機デザインアワード。さらに今回より応募作品は、従来のプレゼンテーションパネルからデータでの提出へ変更になりました。慎重に感染対策を行いつつ、第一次審査を終え、続く第二次審査が2021年11月3日（火）～4日（水）、晩秋の道内各地をめぐる行われました。そして、ついに各賞が決定しました。ここに審査結果をお知らせし、続いて審査委員長による審査経過・総評および各審査委員による選評をお伝えします。

●最優秀賞、優秀賞および入賞が決定

第二次審査は、11月3日（火）に旭川市内1作品および札幌市内2作品を、翌4日（水）に札幌市内1作品、夕張市内1作品、厚真町内1作品、白老町内1作品を訪れて行われました。現地では、作品を前にしての設計者によるプレゼンテーション、審査委員との質疑・応答が交わされました。その後の最終選考会で最優秀賞1作品、優秀賞3作品が決まり、他3作品が入賞となりました（下記の通り）。受賞者の皆さん、おめでとうございます！

第二次審査結果

●最優秀賞（1作品）

作品名 mother`s+（マザーズプラス）
設計者 横尾淳一

●優秀賞（3作品）

作品名 厚真の家
設計者 照井康穂

作品名 PREMIUM SHOP HUSQVARNA SAPPORO
設計者 鈴木理

作品名 夕張市拠点複合施設 りすた
設計者 村國健、尾辻自然、山脇克彦

●入賞（3作品）

作品名 KDDI エボルバ Polaris_Sapporo
設計者 中里嘉亨、垣田 淳、丸林 哲

作品名 北海道立北の森づくり専門学院
設計者 遠藤謙一良

作品名 大きなテラスのある家
設計者 堀部 太

●審査委員長による審査経過・総評

2010年にはじまった本アワードは、今回で第5回目を迎えました。応募総数は29作品であり、第4回の28作品に続き多くのご応募いただきました。また、これまで同様、入賞に関わらず優れた作品群をご応募いただきました。主催者と審査委員を代表して、応募者と応募を承諾いただいた建主の皆様へ心から感謝申し上げます。前回より応募要項の審査基準に「鉄の特性を生かした造形を提案している」が加えられています。建築物やインテリアの規模やカテゴリーによらず、広く作品を募りたいという趣旨からです。今回は、建築施設の中庭を彩る鋼製のアートワークや、小規模ながらも優れたデザインによる工作物群など、趣旨をご理解いただき応募された作品を多数受け取り、審査させていただきました。ここにあらためてお礼申し上げます。応募作品の内訳は、上記アートワークや工作物にはじまり、住宅・商業施設・公共施設・オフィス・学校施設・宿泊施設・医療施設など多岐に及びました。また、新築に限らず改修による提案も多く見られました。

一次審査（2021年10月）では、6名全審査委員出席のもと応募要項の審査基準を再確認し、応募されたプレゼンテーションパネルと応募書類を精読しました。二次審査として現地審査および設計者のプレゼンテーションへ進む作品を選定する段階では、予備投票を行うも多くの作品へと支持が広がり、絞り込むことは大変難しく苦しいプロセスとなりました。長時間におよぶ厳正なる審査と議論の末、全員の合議によって7作品を二次審査対象作品として選定し、これらの対象作品が「入賞」対象であることが確認されました。二次審査（2021年11月）は、2日間に分けて現地にて行われました。全審査委員が赴き、応募作品を拝見し、設計者の方々からのプレゼンテーションを受けながら体感しました。詳細な設計・施工プロセス、特に鋼材の取り扱いやディテール、現地で体得できる鋼材による細部の造形、鉄が成す景観や空間もしくは領域などを読み取ることに努めました。全現地審査終了後、場所を変え最終選考の会議を行いました。最終選考では、先ずあらためて審査基準を審査委員全員で確認し、二次審査へ選考された作品についての所見を述べたうえで予備投票を行いました。「mother`s+（マザーズプラス）」「夕張市拠点複合施設 りすた」「PREMIUM SHOP HUSQVARNA SAPPORO」の3作品が全審査委員からの高評価となり、最優秀賞と優秀賞の候補作品として一致した意見となりました。「厚真の家」に関しては、限られた鉄の使用範囲やディテールなどについて高評価な議論が続き、優秀賞の候補作品となりました。選評詳細については各作品の審査委員選評をご参照ください。上記4作品についての評価は僅差であり、再度全審査委員からの見解と慎重な議論を行いました。結果、審査基準のうち「1. 優れた景観形成に寄与する外観」「2. 建築内部または周囲に、優れた空間や領域を形成」という観点、また北海道の地域特性を引き出す鋼材の使用方法であるという見地から「mother`s+（マザーズプラス）」を最優秀賞作品へ選出いたしました。

次ページからは、最優秀賞（1作品）、優秀賞（3作品）、入賞（3作品）をはたした全7作品について、受賞作品ごとの各審査委員による選評を現地審査の様子を伝える写真とともに紹介します。



北海鋼機デザインアワード
共催：北海鋼機株式会社
(公社)日本建築家協会(JIA)
北海道支部
後援：北海道板金工業組合

《審査委員による選評 最優秀賞(1作品)》

mother's+ (マザーズプラス)

横尾淳一

— 審査委員長 山田 良 —

北海鋼機デザインアワードの審査基準である「鉄の使用によって優れた景観形成に寄与する外観をもっている」「建築内部または周囲に優れた空間や領域を形成している」の観点から、今回最も優れた建築として評価されました。長大な建築立面は北海道の農地に広がる施設の風景と重なります。建築内部に目を向けると、巧みに隠された鋼材によって木架構の連続する空間がデザインされています。鋼の使用によって木質空間を実現し、風景の創造と人の包み込みを高い次元で成した秀逸な作品でした。

— 審査委員 角田 洋一 —

養鶏から工場での加工販売まで空間が直線的に配置されており、従来の養鶏業とは全く異なった新しい養鶏業のスタイルを提案しているような建築物である。明るく近代的な雰囲気から町の活性化、養鶏業の将来性が感じられる気がする。道路側はガルバリウム鋼板の素地で一面が覆われているのに対して、反対側は全面ガラスで内部が見えるようになっており明るく魅力的な建築物になっている。

— 審査委員 小西 彦仁 —

道沿いの草原に横たわるシルバークレーの板金で覆われた一見納屋のような佇まいは、プロポーションが整い普通ではないオーラを発している。単純な家形は奥行き6.8mと長く、軒は無くスッキリとしている。中に入ると家形の集成材は等ピッチに連続し空間を包み込んでいた。間口方向の繋ぎ梁やタイバーを排除し素形の美しさを引き出している。このリニアな空間は養鶏場の施設であり卵からできる製品の6次産業化の店舗である。民間の事業ではあるが公共施設のような役割もこなす。シンプルな板金に包まれた外皮と木質フレームは内外のコントラストが明瞭で良質な建築であった。

— 審査委員 川島 隆司 —

緑の芝の広い敷地に佇む姿が鶏舎を思わせ、その外観は屋根・壁共に立平葺きを働き幅の異なる材料をランダムに葺き上げている。屋根をこの様にランダムに施工することは稀だと思われるが、外壁との一体感が美しく、この建物の形状を引き立たせていると感じる。内部は木材のメインフレームの並びが奇麗で、同様に入口から奥まで続く窓際にあるテーブルの天板が鉄製なのが目を引いた。エントランスの鶏の足跡もユニークでした。

— 審査委員 菅原 秀見 —

地域の産業を背景とする鶏舎や牛舎の形態をシンプルに抽象化したデザイン、すでに北海道の地域の特有の素材として定着しているガルバリウム鋼板素地による仕上げにより、現代的に北海道の地域性を見事に表現した作品である。屋根と外壁仕上げを同一の表現としたこと、内部空間の木架構の連続が形態の抽象性を強調しており美しい。架構をシンプルに見せる構造の工夫、巧妙に隠されている設備計画など、高い技術力がこの建築を支えて

いる。新たなヴァナキュラーな表現とも理解でき、これからの北海道のデザインを代表できるような作品である。

— 審査委員 藤沢 レオ —

苫小牧方面から国道 36 号線を走ると白老町市街地の入り口に位置するこの店舗は、工場のように、鶏舎のようでもある外観と、また取り巻く景観が白老町のものづくり、食、観光を想起させる玄関口としての魅力に溢れています。内部空間は連続する大きな集成材の構造を影で鋼材が徹底的に支えている点、また鋼板、鋼材が各所で力強く空間を成立させており、サイン、什器など細部まで工夫が行き届いていました。

《審査委員による選評 優秀賞(3作品)》

厚真の家

照井康穂

— 審査委員長 山田 良 —

北海鋼機デザインアワードの狙いのひとつである「鉄の特性を生かした造形」としての評価と、それらが建築のオリジナリティに結び付いた秀作です。設計者の言葉による「よごれのデザイン」は、板金の柔軟性があってこそ「雨水の軌跡を操る」ことでした。その結果、稀有でありかつ洗練された外観をもたらしています。あらためて建築設計の魅力を味わう機会にもなりました。

— 審査委員 角田 洋一 —

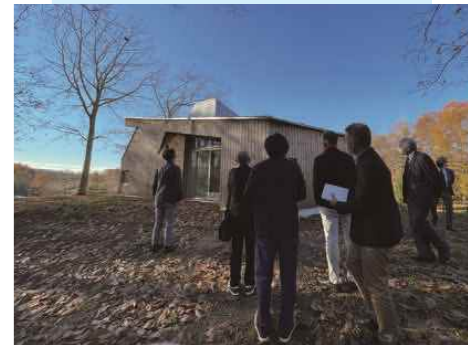
静かな別荘地に素朴に佇んでいる比較的小さな住宅で、裏の木立とのバランスが絶品の雰囲気醸している。木の外壁が慎ましい印象を与えられる中で、トップライト、水切りといった鋼製役物が素敵なアクセントになっている。オーナーの方の満足している様子が目に浮かぶような建物になっている。

— 審査委員 小西 彦仁 —

厚真の山の中の小さな別荘である。外壁は99.9%が木板張で、内部で美しい光を呼ぶ不思議な開口部の外側の水切りに少しだけ板金が差し込まれている。その面積は外壁の0.1%くらいであり、繊細に折り目を入れたり耳を立てたりと芸が細かい。0.1%の板金が切れ味のよい短刀の様にきらりと光り、物量では無い名傍役としての座を仕留めていた。

— 審査委員 川島 隆司 —

木に覆われた立地ということを考えられ、窓からの太陽の光や月明かりの取り入れ方、ここに住まわれる方々の構成や年齢を考え細部にわたり様々な工夫がなされている。水切りや雨樋にガルバリウム鋼板が使用されているが、我々板金施工者がこの様な取付工法を提案したらNGを出されるものと思っていましたが、目から鱗です。細部にわたる工夫に感心させられると共に、少しユニークさを感じました。



優秀賞選評（つづき）



— 審査委員 菅原 秀見 —

おそらくこれまでのデザインアワードの中で鋼材の使用量が最も少ない作品であろう。しかしその効果に作者の優れたセンスがうかがえる。水切りや雨どいなどに必要最小限に、維持管理の視点から板金が使用されているが、水の流れを誘導するのに端部を折り曲げるなど、板金ならではの柔軟性を生かしている。内部空間もアルミ板による水切りに反射した光に満たされた空間となっており、様々な方向からの光がそれぞれの色彩を内部空間に持ち込み、小さいながらも多様で豊かな空間がつけられている。作者の巧妙な技に敬意を表したい作品である。

— 審査委員 藤沢 レオ —

森に面した素朴な佇まいの小住宅には、わずかに使用された鋼板が抜群の効果を放っていました。金属でしか表現できない艶感が適切に適量に挿入され、それらが外光の反射、水切り、汚れの動線と心にくい機能美として存在し、素朴さの中に施主の感性の豊かさ、設計者の品位、ものづくりの粋が感じられました。

PREMIUM SHOP HUSQVARNA SAPPORO

鈴木 理

— 審査委員長 山田 良 —

北欧の林業機械メーカーの商品を主に展示・販売する施設です。設計者は鋼板製サイディングのディテール・おさまりを磨き上げ、ボックス状の外観をもって抽象的デザインを成し遂げています。開口部においても既製品の張り方向を変えるなどにより、鋼板による優れた建築デザインを妥協なく実現しています。オレンジ色の林業機械群とグレー色を主としたインテリアデザインのバランスが美しく、機械製品のショールームにあって審美性を感じ取ることができました。

— 審査委員 角田 洋一 —

交通量の多い厚別通りに面しているにもかかわらず、この建築物は内部の展示空間が外の空間とは全く別世界であるかの如く感じられた。外壁は金属サイディングを用いて、メタリック感を出しながら一歩中に入ると展示品のクオリティを高めるような空間が広がり非常に質感のある建物だという印象を持つことが出来た。

— 審査委員 小西 彦仁 —

除雪機や草刈機などを扱うショールームである。抽象的な長方体の箱を二つ少しずらしその間を吹き抜け空間としてつないだシンプルな空間である。建築要素を減らし金属板と板張あとは開口部といった潔い構成である。これが寧ろ効果的で、ミニマムなディテールと相まって質のよい空気を感じた。モノトーンの配色はおかれている商品とのコントラストが明確で心地よかった。既製品の金属サイディングを見直した瞬間であった。

— 審査委員 川島 隆司 —

箱を並べた様な外観に長尺サイディングを縦貼りし、一部に木材を使用している。この長

尺の縦貼りと色が建物の形状に合って美しく、木材もアクセントとなっていると感じた。そして内部は天井が木材の表し、壁は木毛板の表しで仕上げられ、階段や棚といったところに鉄が使われていて、その組合せが美しく感じられた。

— 審査委員 菅原 秀見 —

3つの箱で構成される小さな店舗であり、ディテールが洗練されていることが空間の構成をわかりやすく際立たせている。素材の選定、端部のおさまりなど卓越した作者の力量により、それぞれの箱が抽象的な箱として絶妙に配置されている。また、箱に挟まれた空間が中間領域として生きており、その限られた開口部がショールームとして控えめにアピールしているところも印象的である。開口部に用いられている木の素材感も金属の素材感を引き立てており、そのバランスが美しい作品である。

— 審査委員 藤沢 レオ —

設計者と施主の緻密な合意なくして実現しなかったであろう今回最も禁欲的な建築でした。外壁鋼材の工業規格をフルに活用することと、その弊害に折り合いをつけた外観が、店舗内部に陳列されるデザイン性の高い製品とともにコンセプト的な空間を表明していました。

夕張市拠点複合施設 りすた

村國 健・尾辻自然・山脇克彦

— 審査委員長 山田 良 —

大屋根の下に地域に求められる部屋が点在する、鉄骨造ならではの施設です。数種のガルバリウム鋼板による外壁は独自の肌理を見せ、光の変化と共に表情豊かに映りました。インテリアのディテールは利用者にとっての使い勝手が優先され、建築作品としての完成度もさることながら、地域住民へ設計者の視線が向いています。各所の鋼材が大胆かつ妥協なくデザインされた優れた作品でした。

— 審査委員 角田 洋一 —

夕張市復活の象徴としてコンパクトシティの起点として建設された施設で地域住民の活動拠点になっている。建物の一面には駐車場、バスターミナルなどが配置されており、一方反対面は裏山の森が配置されておりいい雰囲気を出している。建物自体は屋根、庇、外壁が異なった葺き方のガルバリウム鋼板でおおわれており魅力的な外壁になっている。これからの夕張市の復活を感じさせる魅力的な建築だと感じられた。

— 審査委員 小西 彦仁 —

夕張市は沢尻いに街が点在し中心性を持たない街である。その中において求心力を待たせる意味で今回の施設は重要な役割を担うと感じた。審査時は秋の文化祭で市民の作品が展示されていたが、別の空間ではセミナーが行われていた。鉄骨造の空間はおおらかにワンルームに近くつけられているが、各機能は周到に確保されている。外皮は用途に応じて板金の種類を変え使われており、台形平面と片流れ屋根の関係で不思議なパースペクティブ



優秀賞（つづき）・入賞選評

5th HK DESIGN AWARD



がおきている。板金の外皮は厳しい自然に対峙する安心感を与えている。

— 審査委員 川島 隆司 —

現地審査した日は、夕張市民が作成した多くの展示物が飾られ、たくさんの市民で賑わい、まさに市民の拠点で憩いの場であることが感じられた。その施設は、入り口から奥にある裏山に向かって天井高が高くなり、形状を台形にすることで周辺の景色を取込み建っている。また、地上からは見ることが出来なかったが、防水屋根部も鋼板製の防水が使われており、屋根・外壁のすべての外装材が板金であることも、私としては嬉しい限りだ。

— 審査委員 菅原 秀見 —

公共施設を集約する中でつくられた地域の拠点施設であり、鉄骨造で実現した一つ屋根の下の空間に地域住民の活動の場が有機的に配置されている。開放的な空間の中でつながる活動が地域活性を誘発する作品である。大空間を覆い、柔らかい表情を与える木ルーバー、その背景としての荒々しい表情も持つ鉄骨の構造材の質感が空間に活気を与えている。外壁はそれらを包むようにガルバリウム鋼板で構成され、場所に応じ葺き方を変え、スケール間を緩和するとともに見る角度により様々な表情を持ち、地域固有の景観をつくっている優れた作品である。

— 審査委員 藤沢 レオ —

夕張市の新しい街づくりの象徴に相応しく、開かれ、集い、使える空間が魅力的でした。住民ワークショップを重ねて導かれた多種多様な空間機能を構成するため、鋼材による構造デザインで大空間を実現しつつ、視覚的には広く、華奢に見える工夫が秀逸でした。また外観に使われた異なる波板鋼板のテクスチャが効果的に配されていました。

《 審査委員による選評 入賞（3作品） 》

KDDI エボルバ Polaris_Sapporo

中里嘉亨・垣田 淳・丸林 哲

— 審査委員長 山田 良 —

微かに色の違うパターンのガルバリウム鋼板による外壁は、まるで風化した木材材のように見えました。施設の役割から周辺地域に対してプライバシーを重視しなければならず、それ故に高さを抑えた水平ラインとしての窓が建築デザインの特徴にもなっています。周辺地域にとって大きく映る外壁面を、鋼板のデザインにより和らげています。建築と鉄の優れた連関を独自のデザイン手法によってもたらした作品です。

— 審査委員 角田 洋一 —

大きな外壁は光沢率を変えて白のグラデーションになっており、光の反射加減により金属には見えない質感となっている。施工時に色合い等細心の注意をもって合わせた跡がうかがえる。さらに開放的な中庭を中心として外側の街の雑踏とは隔絶された空間が形成され

ているが、一見すると外部からアプローチしにくい印象を持つが中に入ると印象が一変する。コールセンターとして利用されている建物に要求される特性を十分に考慮された建築物だと考える。

— 審査委員 小西 彦仁 —

4色の立て平板金は幅を変えて貼り込みマッシュピッチな四角い空間を包み込んでいる。このサイズの建築ではそうない光景である。それは街に対して季節や天候により表情を変えこの場所のランドマークとしてここを通る人々を見守るであろうと感じた。一方中庭側の構成と板金にひとひねりほしかった。

— 審査委員 川島 隆司 —

この建物は建築中から目にしており、外部が板金で覆われ中の様子がほとんど伺い知れないことから大変気になっていましたが、今回の審査にあたり、ここの業務内容等の理由で中が見えにくくなっていると知り納得です。中庭に面した外壁も一面にガルバリウム鋼板の立平葺きが使われており、外部は幅の異なる立平葺きを色も若干変えグラデーションにしていますが、内部の外壁は限られた人しか目にする事が出来ないからか、一色でシンプルに仕上げてあります。開口部が少ない外部は板金が強調されとても美しく見えます。

— 審査委員 菅原 秀見 —

施設の特徴から外に閉じ、内側に開くという明快なコンセプトが見事に建築計画として実現されている作品である。倉庫群が多かったという立地条件を背景とする外装材の選択、中庭を光で満たすなどガルバリウム鋼板の特徴をうまく活用している。外に閉じるという構成を持ちながらも1階のカフェや保育所越しに中庭の空間が感じられ、敷地に隣接するサイクリングロードに対して暖かな表情を与えている。気候環境の厳しい北海道においての一つのデザインの指標となりうる優れた作品である。

— 審査委員 藤沢 レオ —

大きな通りに面した建物は大きな外壁をキャンバスとして、地域の歴史と北海道の長い冬を意識したランダムな白系色のテンポによって、印象派絵画のような景観を立ち上げ、気持ちのいい外観が印象的でした。また中庭へむけての視覚的、精神的な抜けの機能は設計の面白さを感じることができました。

北海道立北の森づくり専門学院

遠藤謙一良

— 審査委員長 山田 良 —

注目を集めている林業の担い手のための専修学校です。木材を学ぶ場に相応しい、道産木材を主とした、意匠と施設目的が妥協なく融合した建築です。設計者は無垢の木材を使うことにもこだわり、それ故に構造的補完が必要な部位には美しく鋼材が配置されています。道産木材の肌理と繊細な鋼材のデザインが融合した秀作でした。



入賞選評（つづき）

— 審査委員 角田 洋 —

建物の用途が森づくりの学校であることから、木材の使い方が秀逸だと感じた。その木材の使用に対して鋼材がアクセントを与えており素材のバランスがとても素敵な雰囲気を醸している。いくつかの空間に多様な印象を与えられており、木材と鋼材が程よくコラボされている魅力的な空間が形作られた建物だと感じた。

— 審査委員 小西 彦仁 —

カーボンニュートラルの時代になり、今後益々脚光を浴びる林業の将来を担う若者を育てるための施設である。多様な木材により構成された空間は多様な構造システムによって支えられている。木と鉄による構造は互いに役割を補完し多様な空間をつくりあげていたが、多様な架構構成の印象が強すぎる印象であった。

— 審査委員 川島 隆司 —

林業の教育施設ということで、内・外部とも木材をふんだんに使い、木材の良さ・美しさを強調した建物でした。そして階段・天井や手摺等に鉄を使い、屋根廻りや2階の外壁にカラーガルバリウム鋼板を使うことで、木材が一層きわだち美しく見えました。内部も開放感がある空間が広がり、林業を学ぶ学生さんには素晴らしい環境であると感じました。

— 審査委員 菅原 秀見 —

施設の性格から製材、集成材 CLT など木材が主役の建物ではあるが、構造や外壁などに補助的に鋼材が使われている作品である。構造としては張弦材として用いられており、木架構をきれいに見せること、CLT のロングスパンに寄与しており、それを見せることで、ハイブリッド構造の技術を可視化している。外壁や軒においてもガルバリウム鋼板が建物を雪から守るために用いられており、これから森づくりを学ぶ若者にとって、木材利用の多様性を理解するのにふさわしい作品であるといえる。

— 審査委員 藤沢 レオ —

森づくりとものづくりを学ぶため、ふんだんに使われた木材空間が強調されるが、各所の構造で鋼材が支え、それらを隠している部分、空間性を得るためにむき出しにしている部分など工夫が凝らされ、素材感のアクセントとしても効果的でした。

大きなテラスのある家
堀部太

— 審査委員長 山田 良 —

家形のガルバリウム鋼板の立面が市街地の中で一際目を惹きました。白色板金の外壁に対して親しみを覚えるのは、その形状と地上部の開放性故なのだと思います。ポリカーボネート製の大屋根が半屋外空間をもたらし、冬の北海道を楽しもうとするクライアントと設計者の意図の結晶に映りました。

— 審査委員 角田 洋 —

住宅としては珍しく大きな金属外壁に覆われて、一瞬内側がどうなっているか非常に興味の沸くデザインになっている。内側には大きなテラスがありガラス窓と相まってとても開放感のある空間になっている。洒落なデザインの中で生活される施主にとって非常に満足感のある住宅だと感じる事が出来た。

— 審査委員 小西 彦仁 —

大きな三角屋根の家は空間の半分以上が半屋外空間であり、居住空間との視覚的、物理的な接続空間で生活をより楽しくするために効果的である。白い板金の外壁は抽象化されボリューム感が弱められ効果的である。ただ計画に図式性を強く感じてしまう、周辺との有機的繋がりがあると更に住むことの豊かさを感じるのではないかと思った。

— 審査委員 川島 隆司 —

住宅の密集した中に建つ真っ白で奇麗な家というのが第一印象でした。外壁面には白の長尺横葺きが葺かれ、ポーチを上がると明るく広いテラスが広がり、家の中からは大きな窓越しに眺めることができます。施主はこの空間を一番作りたかったのであろうと感じました。横葺き板金の長所でもある長尺工法が映える素敵なお家です。

— 審査委員 菅原 秀見 —

住宅そのものは単純なプランであるが、ポリカーボネートの屋根がかかる大きなテラスが隣接することで生活空間の豊かさと多様性を獲得している。テラス空間の両端は遠くの山の景色を背景とする家形のガルバリウム鋼板の壁面で挟まれている。板金のおさまりの丁寧な扱いにより家形の形態が抽象化され、金属という素材を使いながらも素材感を消しており、むしろ温かい表情を持っている。この光にあふれた空間は作者のやさしさが反映されているようにも感じられる。家族とともにこのテラスがどのように成長していくのかが楽しみな作品である。

— 審査委員 藤沢 レオ —

住宅街の T 字路の突き当たり効果的に配置された白い鋼板外壁が借景の山々と相まって、ひとつの風景を浮かび上がらせていました。また内部と外部の中間領域の提案が心地よい空間となり、贅沢な住空間を創出していました。

受賞者の皆さん、誠におめでとうございます。

そして今回は、新型コロナウイルス感染症による行動制限などの制約がかかる中、数多くのご応募をいただき、アートワークや創作物から住宅・商業・公共建築まで、鉄を用いたバリエーション豊かな作品に出会うことができました。応募者の皆さま、ありがとうございました。

なお、本アワードの表彰式は2022年5月13日（金）に行われる予定です。

次回アワードの開催は2年後を予定しています。また多くの皆さまより、鉄を使用した意欲ある作品をご応募いただけることを願っております。

